

# プレスリリース

2017年 6月 19日

気象庁気象研究所

国立大学法人東京大学大気海洋研究所

国立研究開発法人海洋研究開発機構

## 台風全域の超高解像度シミュレーションが解明した風の微細構造

台風の詳細構造を解明するために、理化学研究所のスーパーコンピュータ「京」を駆使し、これまで不可能だった台風全体を高分解能(100m)で計算する「台風全域ラージ・エディ・シミュレーション」を実施して、海上の台風の地表面付近、特に台風の最も風速が強い領域における風の微細構造を初めて明らかにしました。

その結果、これまでに指摘されていた壁雲の外側にあるロール構造に加えて、台風の壁雲付近にも別の構造を持つ新しい2種類のロール構造が出現しました。これら新しい2種類のロール構造が計算されたのは本研究が世界で初めてです。このロール構造により、海上の台風でありながら局所的に平均風速の4割に達する著しい風速変動を伴う突風が吹いている計算になりました。

本研究で得られた結果は、これまで知られていなかった台風内の詳細構造を明らかにしたという学術的な貢献に加えて、防災上も、地表面付近に生じる突風の強度についての情報を与える重要な成果です。また、数値予報モデルが台風の強度をよりよく予報するために必要な、地表面付近の水蒸気などの輸送を表現するパラメタリゼーションの高度化にも貢献できます。

詳細は[気象研究所のサイト](#)をご覧ください。

国立研究開発法人海洋研究開発機構

広報部 報道課長 野口 剛